

台風第 21 号、北海道胆振東部地震について

—あらたな「想定外」の発生—

平成 30 年 9 月 12 日

台風第 21 号、北海道胆振東部地震によって犠牲になられた方々のご冥福をお祈り致しますとともに、被災されたすべての方々にお見舞い申し上げます。

平成 30 年 7 月豪雨のあとも、自然災害がつぎつぎと発生しました。

今年最強といわれた、台風第 21 号の襲来では、高潮によって関西空港、神戸港などに大きな被害がでました。海水による浸水などによって関西空港が一時全面閉鎖になるなど、物流、人の移動に深刻な影響がでました。徐々に改善されつつあるとはいえ、いまでもこの影響はつづいています。強風による果実の落下など全国的な農作物への被害も甚大でした。

関西空港は、海面の埋め立てによって建設された空港であり、地盤沈下がつづいていました。高潮を想定し、空港を高い壁で囲んでいましたが、今回の高潮では、その壁をこえて大量の海水が空港内に流入しました。

強風と高潮に激突して橋が破損、通行に大きな支障をきたす事故もかさなりました。

一時的とはいえ、高潮による関西空港の完全閉鎖は、「想定外」でした。

台風 21 号が、北に去ったとおもったら、北海道厚真町を震源とする地震（胆振東部地震）がおきました。

M6.7、最大 7 という直下型の大地震でした。

地震によって、震源の直上域では、広い範囲にわたり、山々の山腹という山腹に、頂上からおおきな表層地滑りがいくつも発生し、大量の土砂が崩落しました。山筋に落ちた土砂は、土石流となって下流にくだりました。

山々の景観は、まさに「一変」しました。しかも「一瞬」のできごとでした。カラマツなどの美しい緑に覆われていた山々は、頂上や峰にわずかに緑を残した以外、まるで巨大な砂丘がつかぬような姿になりました。テレビの画面などをみて、あまりの変貌ぶりに、おもわず息をのんだ方は少なくないとおもいます。犠牲者もでました。

とくに、厚真町では、山沿いにあった家々に、地滑り、土石流によって土砂が流れ込み、就寝中であった多くの住民が亡くなりました。

札幌では、液状化現象がおきました。

この地震では、電気の供給が、一部地域ではなく、道全体でストップするというブラックアウトがおきました。異常事態でした。

震源地の近くには、北海道の電力の半分以上を供給する苫東火力発電所があります。地震によって発電機が損傷し、発電ができなくなったのです。

電気の需要（電力消費）と供給（発電量）が、バランスがとれていることで、発電施設をはじめとする電力の供給網の安定と安全が保たれています。バランスがくずれ、電気の周波数が大きくかわると、供給網に組み込まれているすべての発電機は、破壊から免がれるため自動的に停止し送電はストップします。

これがブラックアウトです。

電力会社は、ブラックアウトが発生しないように緊急停止の措置など万全の措置をしている、といわれていますが（東日本大震災ではこのシステムが機能しました）、現実にはブラックアウトはおきました。道内では生活、経済活動、医療などすべてにわたって深刻な影響がでました。物流がとまったことによって、列島全体へも影響がでました。

ブラックアウトは、北海道だけでなく、現代社会のもつ脆弱性をうきぼりにしたといえます。

さいわい、電力会社、国などの懸命の努力によって、かなり短時間で電力の相当量は確保され、ブラックアウトの影響は、最小限度でおさえられたのかもしれませんが、しかし、背筋の寒くなる事態であったことは、いくら深刻にとらえられても深刻過ぎることはないとおもいます。雪がふりつもった激寒期でなかったことは、単なる偶然であることも忘れてはなりません。

ブラックアウトも、「想定外」でした。

東日本大震災の最大教訓である「想定外を想定して準備しろ」は、まだまだ定着していないのかもしれませんが。

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震(M9.0)の発生以来、日本列島は不安定な状況に入ったと警告する地震学者、火山学者は少なくありません。震災後、M5以上の地震発生件数はすえているという指摘もあります。天災発生の歴史は、大きな地震があったあと、数十年の期間で、あらたな大地震の発生、火山活動の活発化などの現象がおきていることを伝えています。

こんなことを、常に気にしながら日常生活をつづける必要はないとおもいますが、各家庭においては、いざという状況に備えた最低限の準備をしておくことは、災害教訓をいかす大切な第一歩です。